

前項が多義的な複合動詞の生産性—知覚の複合動詞の分析による試論

高嶋 由布子

京都大学 大学院 人間・環境学研究科 takashima@hi.h.kyoto-u.ac.jp

本稿では、前項が多義的な動詞である複合動詞の生産性について認知言語学の観点から、意味の問題を中心に検討する。知覚の他動詞「見る」と「聞く」が多義的であることに着目し、これらの連用形を前項に取る複合動詞を分析対象とした。このとき、とる後項が同じでも、ただの感覚モダリティの差異に収束しないことが観察される。これは、「見る」が評価や判断の意味に拡張するのに対して、「聞く」はコミュニケーションの様態の意味に拡張していくことが原因であることを示す。これにより前項の多義構造が複合動詞の生産性と相関があることを結論付ける。

1 はじめに

複合語とは、自立語の合成によるもので、本稿で扱う複合動詞は、動詞の連用形+動詞の、V1+V2型連用形複合動詞である。二つの動詞は前項・後項どちらも独立して意味用法をもち、自立語としての機能をそなえた動詞であるものを分析対象とする。

ここでは前項が多義的な動詞の場合、どのような後項をとることができるのか。また、どのような後項をとるとき、どの意味をとるのかを検討する。

本稿では、知覚の他動詞「見る」と「聞く」が似て異なる多義構造を持つこと、これらを前項に持つ連用形複合動詞が多数存在することに着目し、この2つを前項に持つ複合動詞の分析を進める。

- (1) a. {見/聞き} つける
 b. {見/聞き} 損なう
 c. {見/*聞き} 渡す
 d. {*見/聞き} 漏らす

2つの前項に共通する後項でも(1a)感覚モダリティが視覚と聴覚が異なるだけでどちらも同じような意味になるもの、(1b)感覚モダリティが違うというだけでは説明できないものがあり、更に(1c)「見る」だけで使えるもの、(1d)「聞く」だ

けで使えるものがある。本稿ではとくに、(1a, b)の違いを考察する。

2 先行研究と課題

複合動詞の後項になる動詞が、どのような意味を持ち、どのような複合動詞を作るかの傾向については、姫野(1999)など詳細な記述研究がなされてきた。

しかし前項の多義性、あるいは複合動詞全体の意味拡張が何によるかについての考察はこれまでのところあまりなされてきていない¹。

ここでは、まず、前項の多義構造をざっと整理したうえで、石井(2007)の複合動詞形成の《アスペクト・ヴォイス》モデルの考え方をもとに、前項の語義と後項のアスペクトのマッチングという考え方を取り入れ、分析を進める。

3 知覚の複合動詞の収集と分類

実際に使われているか、という観点から、文学作品のコーパスである新潮文庫の100冊コーパスを用い、用例を集め、集計した。²

¹ 高嶋・土屋(2008)は複合動詞全体の意味拡張を扱ったものであるが、「見る」に限られており、このような研究は認知言語学分野でいくらか存在する。

² 新聞コーパスより、表現が偏らないだろうという考慮からである。例えば新聞の場合、「聞く」

		見+V2	聞き+V2
共通	意味的に共通	見つける, 見知る, 見出す 見分ける, 見飽きる, 見まわる 見入る, 見惚れる, 見捨てる, 見過ごす, 見届ける	聞きつける, 聞き知る, 聞き出す 聞き分ける, 聞き飽きる, 聞きまわる 聞き入る, 聞き惚れる 聞き捨てる, 聞き過ぎす, 聞き届ける
	意味的に異なる	看取る, 見まわる, (見分ける) 見違える, 見損なう, 見込む	(聞き取る, 聞きまわる) 聞き分ける 聞き違える, 聞き損う, 聞き込む
一方だけにある		見惚れる, 見向く, 見渡す, 見通す 見据える, 見放す, 見直す, 見抜く, 見かねる, 見きる, 見誤る, 見初める, 見つめる, 見限る, 見極める 見開く, 見合わす, 見交わす…	聞き入れる, 聞きただす, 聞き流す, 聞き漏らす, 聞き及ぶ, 聞き伝える

- (2) 知覚の他動詞「みる、きく」の連用形+動詞
 みる：見, 観, 看, 診, 監
 きく：聞, 聴, 訊

用例の収集にあたっては、「見つける」など固定化して辞書に載っていると、「聞き誤る」など分析して認識可能なものを区別せず、また、前項の表記もひらがなのほか(2)に示したそれぞれの表記のものをすべて集めた。

見+V2のV2の異なり語数は202で、聞き+V2のV2の異なり語数は61であった。そのうち、どちらにも共通して使われるV2は46種類あった。

これらを、(1)で挙げたような分類をし、表のようにまとめた(紙幅の都合上、例は抜粋)。

4 前項の多義の整理

「見る」「聞く」に関しては、高嶋(2007a, b)でその多義構造について整理しており、これを利用して、同じ後項が使えないこと、同じ後項でも

などが「聞き込み調査」という固定した表現が多くなる傾向あげられる。

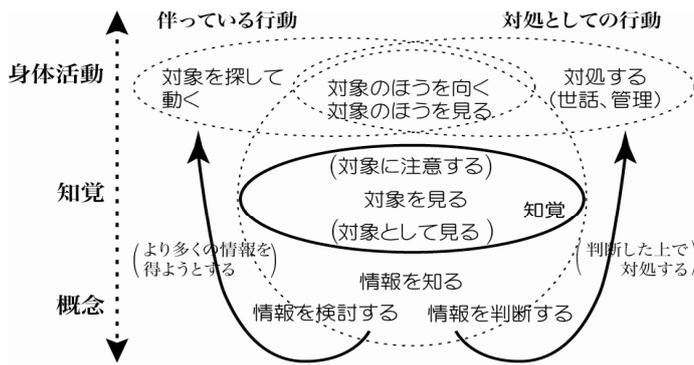
異なる意味になることについて観察を進める。

- (3) a. 太郎が絵を見ている <目を向ける>
 b. コップを見る <視覚での知覚>
 c. 様子を見る <検討する>
 d. 劣勢と見る <評価・判断する>
 e. 面倒を見る <世話(対処)>
 (4) a. 音楽を聞く <聴覚での知覚>
 b. 分からないところを訊く <質問する>
 c. いうことをきく <従う(対処)>

これらを、同じ行動のスキプトという枠組みから比較したものが図である。このとき、各々の図の右半分は、<判断>という完了のアスペクトを持つが、左半分は<検討>という継続するアスペクトを担っていることに以下では注目する。

5 前項と後項のマッチング

後項が、知覚の様態を更に強化・詳述化・付加するようなものは、「見る」「聞く」どちらにも使える。例えば、「知る」ことや「分ける」ことや、



(a) 「見る」の行動のSCRIPT

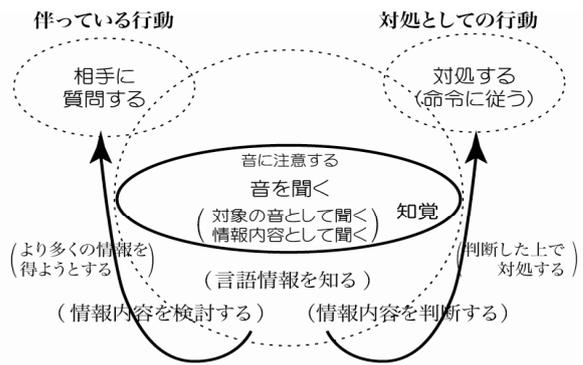
情報を〈発見する〉ことを示す「見つける、聞きつける」、評価を伴う知覚である、「ほれる、比べる、間違う」などは、どちらの前項にも使われる。このようなとき、後項が概念上の操作を示すので、「見る」は概念的〈検討・判断〉の意味に拡張せず、〈視覚での知覚〉を示す。

後項が、イベントの完了をしめすようなアスペクトを持つ場合、前項が完結性のあるイベントに解釈される。

- (5) a.見 {捨てる, 過ごす, 届ける, とる}
- b.聞き {捨てる, 過ごす, 届ける, *とる}
- (6) a.見 {落とす, 忘れる}
- b.聞き {落とす, 忘れる}

このとき、(5a)の前項がもつのは、〈世話をする、管理をする〉といった対処の意味である。これは「見る」では判断した上での〈対処〉という方向の拡張があることに合致する。(5b)の「聞く」でも、「他者の願い事を聞く」=それに対して〈対処〉する、という方向がある。これらは共通していることが確認できる。

これに対し(6)では、「見る」と「聞く」の違いが現れる。(6a)では、「目で見て、あるいは概念的に検討する」こと、(6b)では「わからないことを訊く」=〈質問〉することといった一回一回生起するイベントをやり逃すといった具合である。語義の観点からすると、異なるものを指示しているように見えて、意味拡張の方向性という観点を加味すれば、共通点が見出せる。



(b) 「聞く」の行動のSCRIPT

- (7) a.見 {違える, 損なう}
- b.聞き {違える, 損なう}

これは、(7)にもあてはめることができる。要するに、「見る」ことは、概念的に「見る」=検討することまで拡張するのに対して、「聞く」の場合は、それが質問することに置き換わるので、意味的に異なっていると感じられるのである。

それでは、「見る」だけに使われる後項はどのような特徴があるのだろうか。

- (8) 見開く, 見交わす, 見合わせる

まず、(8)のようなものは、他者と共有できる目の動きを示しており、身体的な制約が大きいといえる (cf. 高嶋・土屋 2008)。「聞く」で使えないのは、耳が目のようには動かさないからである。「見合わせる」は次の(9)と同じように拡張する。

- (9) 見向く, 見渡す, 見通す, 見据える, 見放す, 見抜く
- (10) 安いうなぎには見向きもしない
データを見渡す
将来を見据えた計画

(9)のようなものは、移動に関係する後項がとられる。これは、視線の移動 (cf. 松本 2004) を示し、視線の移動というイベント全体として〈判断〉へ拡張する。(10)のように目による知覚でない意味へ拡張している。さらに(11)のような複合動詞は、知覚や視線操作の意味が薄れ、前項が

拡張して、概念的〈判断〉というイベントと後項の意味のマッチングが起こっている。前項が「聞く」の事例がある場合は構成的に、〈聴覚での知覚〉＋〈概念的操作〉になることが予測されるが、コーパス中では事例が存在しなかった。

(11) 見誤る、見限る、見極める、見かねる

「聞く」だけに使われる後項について観察すると、(12)のように全体としてコミュニケーションの側面が際立つものと、(13)のような移動表現があることがわかる。

(12) 聞きただす、聞き伝える

(13) 聞き入れる、聞き流す、聞き漏らす、聞き及ぶ

(11)は、「聞く」に含まれるコミュニケーションの側面を強化・詳述化・付加する後項で、後者は、情報の移動の身体性からくるものだと考えられる。聴覚刺激は知覚者に対して、やってくるというダイクシスを持っていることが予測でき、この予測から、聴覚知覚者は、刺激の着点に居ること、刺激は流動物のメタファーが適用可能であると考えることが出来る。これは(8)の視線の移動に対応しているが、複合動詞全体で意味拡張することは出来ない。

このほか、「聞き分ける」は、〈言われたことを理解〉したうえで〈対処〉するという、イベント全体としての推論からのメトニミー的拡張であり、「見分ける」がとりわけ〈対処〉を含意しないのだが、概念的〈判断〉をするに留まっているのは異なる。

6 結論

ここでは、前項が多義的な複合動詞のとりうる後項について、多義構造が異なる二つの知覚動詞を前項にする複合動詞をコーパスから収集して観察することで考察した。

前項の意味を強化したり、より詳しくしたり、付け加えたりする後項や、アスペクトを示して、

合致するアスペクトの意味を引き出す後項が観察された。さらに、身体運動的な後項が付け加わっても全体で脱身体的な、あるいは概念的な意味へ意味拡張をするものもあれば、前項が拡張したあとの意味だけとマッチングが起こって意味をもつ組み合わせもあることがわかった。これらは、前項がそのような拡張をすることに基づいており、「見る」が概念的〈判断〉に拡張して、視覚での知覚という意味を失うことに並行して、複合動詞も視覚での知覚という身体性を失うが、前項が概念的な意味だけにならない「聞く」では、聴覚での知覚という側面は保持される。しかし「聞く」のメトニミー的拡張であるコミュニケーション的な意味を後項は引き出すことができる。

このような点から、前項の多義構造がこれによって形成する複合動詞の意味のマッチングや意味拡張にまで反映することが示された。

参考文献

- 姫野昌子(1999). 複合動詞の構造と意味用法. ひつじ書房.
- 姫野昌子(2001). “複合動詞の性質.” 日本語学 20 (9), pp.6-15.
- 石井正彦(2007). 現代日本語の複合語形成論. ひつじ書房.
- 松本曜(2004). “日本語の視覚表現における虚構移動.” 日本語文法 4 (1), pp.111-128.
- 高嶋由布子(2007a). “知覚動詞における多義構造の重層モデル化: 伴う行動と概念操作の観点から.” 言語処理学会 第13回年次大会 発表論文集, pp.835-838.
- 高嶋由布子(2007b). “知覚の言語表現の多義構造にみる感覚モダリティの特徴—「見る」と「聞く」に伴う行動の観点から—.” 日本認知科学会 第24回大会 予稿集, pp.88-89.
- 高嶋由布子・土屋智行(2008). “「見る」から探る視線と価値の間主観性と主体性.” 社会言語科学会 第21回大会 発表論文集 (印刷中).
- 山梨正明(2000). 認知言語学原理. くろしお出版.